彙報

京都大學文學部哲學科卒業論文題目

——昭和二十六年三月——

哲學專攻

岡本　好男　學と生（デカルトをめぐつて）
田中　千里　Ein phänomenologischer Zirkelbeweis (Husserl と Heidegger の Phänomenologie)
高川　定彦　カントに於ける懐疑的方法
—カントに於ける形而上學の問題に對する一考察—
高橋　弘通　カントに於ける物質認識の問題
上田　春雄　Pragmatism
東光　寛英　聖トマスの知性論
門脇　卓爾　カントに於ける構想力
富元　俊明　カントに於ける經驗の可能性について
太田　純孝　カント空間時間論の一性格
高橋　昭二　カントに於ける超越的自覺
河原林剛郎　純粋理性批判に於けるカント
福田　勝三　Kant に於ける Gesetzlichkeit
松下　八郎　ヘーゲルの論理に於ける實踐の成立
前川　敏　純粋理性批判における物自體
小川　洋　ニイチェ——運命愛の思想を中心に
是恒　高保　カントの宗教思想について

西洋哲學史專攻

金　隆鎭　ディルタイに於ける歴史的人間
藤澤　令夫　所謂プロタゴラス説とプラトンに於ける知覺的認識の問題
大淵　和夫　バートランド・ラッセルの知識論
孫　時英　聖トーマスに於ける認識論の研究
加藤　清　カントの先驗的統覺に就て
山野　耕治　プラトンに於ける魂の不死をめぐりて

印度哲學史專攻

永富　正俊　マーンドゥクヤ頌一元論の論理構造

支那哲學史專攻

高山　泰巖　高樑について
神樂岡吕俊　墨家思想ノ成立

心理學專攻

丹下　庄一　提示材料の記憶に及ぼす影響
—Reminiscence に關する研究—
橋本　眞　「想起」(Reminiscence) ニ關スル實驗的考察
—特ニ知能トノ關係ニツイテ—
渡邊十四生　推理過程に關する實驗的研究
廣田　實　繪畫と人格
—幼兒の自由畫に關する實驗的研究—
岡本　夏木　人格の硬さについて
野村　昭　Blocking 現象の條件分析的研究

倫理學專攻

頴娃　久光　グリーンに於ける「自由の體系」
—「社會倫理」—
野村　博　グリーンの國家觀
淺尾　榮　人間の Leben と Idee との關聯について

教育學教授法專攻

右島　洋介　社會の教育的機能と學校教育の立場
味岡　耳平　學習について
吉村　一郎　ゲーテの教育思想
安井　彰生　米國カリキュラムの歷史的研究

美學美術史專攻

石田　正　藝術史に於ける歷史的認識の問題
上平　貢　造形藝術に於ける樣式について
—ヴェルフリン「基礎概念」成立の根據—
金　錫範　藝術とイデオロギー
乾　由明　藝術形成の基礎構造
北根　肇　故鄕への途
—美的故鄕について—
武田　恒夫　美的形式について
谷村　晃　音表象論
藤井　旭　演劇藝術論攷
吉岡健二郎　藝術の創造について
—カント天才論の一考察—
稲　光臣　文學樣式の歷史（哲學）的展開に關する考察
—（偉大なる）敍事文學について—
三輪　佳之　批評藝術論
藤野　恒道　國語の特質研究

宗教學專攻

眞崎　光晴　Kant に於ける認識と宗教について
小野木　宏　キルケゴールの愛情について
石井　孝　娘生から眞人へ
—臨濟錄に於ける求道の課題—
北林　勇　シュライエルマッヘルに於ける「宗教の本質」について
寺鶴　富郷　宗教的人格の本質
—維摩經に於ける菩薩の解明—
林　敏夫　ドストイエフスキーに於ける人間的自由

社會學專攻

大前　和之　社會行動について
川口　忠彦　農奴解放より二月革命に至る期間のロシヤに於ける階級について
鈴井與士勝　我が國封建時代の都市
西　伊策　社會學學說史上に於る進化の問題に就ての一考察
濱野雄四郎　一村落の實態
星野　久　イスラヘル宗教の成立に於ける社會學的考察
松山　美嘉　漁業村落の社會學的考察

佛教學專攻

正林　悟郎　親鸞に於ける根源惡の自覺
竹内　長敬　法華經の一乘思想
禿　坦　唯識哲學に於ける種子思想
石川　瓦昱　楞伽經の課題

基督教學專攻

小川　圭治　絶對者に對する絶對的關係
—キエルケゴールについて—

櫻井　一　舊約聖書に於ける契約觀

名出　潔　ヨハネ傳福音書における ἀλήθεια の問題

關西哲學會發會總會並記念公開講演會報告

一、發會總會は五月十三日午前九時より、京都大學文學部第七教室に於て施行された。參會者約二百名、盛會であつた。尙當日は、朝永先生の御出席もあり、發會式に相應しい挨拶を戴いたことも、會員一同の喜びとするところであつた。次第は次の通りである——

一、發起人代表挨拶

山内得立教授(京大)が特に本會成立の趣意に關し、發起人一同を代表して報告。日本哲學會を、地方的全國的に充實せしめ、單に名目的形式的なものに終らしめぬことに、本會成立の主目的が存することを陳述。

一、座長の選定並挨拶

今井仙一教授(同志社大)座長を依囑せられ、挨拶あり。

一、來賓祝辭

朝永三十郎先生より次の樣な意味の詞をたまわつた。

本會出席の案内をうけたとき、身體的にも老齢のこと故不自由多く、幾度か斷つたものゝ、勸誘者の、自分の孤獨を慰めんとするかの心遣いに感謝を述べたいと考えて出席した。孤獨と言えば、それは老年と長命に結びついている。元來、不思議にも、哲學者には長命が多い。自分もその一人である。長命それ自身は何も貴いことではないが、個人の長命はそうであつても集團の長命は之と異る。關西哲學會の長命を願う意味で、自分の出席にも、幾分かの理由が認められゞば幸いである。なほ現在のところ、政治上の事情のため、少なからざる諸君と席を共にし得ざるを遺憾とする、やがて相集いうる日を祈りたく思う。

一、本會創立に至るまでの、發起人會、準備委員會其他の經緯に關し、更に現在會員數(約三百名)、會計に關し、高田三郎教授(京大)の報告。

一、會規の審議決定

田中美知太郎教授(京大)の說明と質疑應答あり。こゝに決定を見た會規の大要は別記(六〇頁參照)のようである。

一、役員の決定(委員の選出は地區別比例制の互選による)

委員(委員長〔二重マル〕、常任委員〔マル〕、は委員の互選による)

(京　都)○今井仙一、○世良壽男、○高田三郎、武内義範、○田中美知太郎、○野田又夫、濱田與助、久松眞一、◎山内得立、山元一郎。

(大　阪)○岡野留次郎、○澤潟久敬、○坂田德男、三宅實、

(兵　庫)　片山正直、○武市健人。

（和歌山）石村忠次。（三　重）伊藤法俊。
（滋　賀）秋山範二。（奈　良）○服部英次郎。
（岐　阜）室田泰一。（石　川）鬼頭英一。
（高　知）笹原邦彦。（愛　媛）大喜多　秀。
（岡　山）高山　峻。
（廣　島）河瀨憲次、松本　厚。
（鳥　取）前田正人。

會計監査（選定は總會、之を委員會に委囑す）
梯　明秀、田中　熙。

幹　事（當任委員會の委囑による）
石田　仁、上田泰治、三村　勉、森　進一。

一、右次第にて、午前の總會終了、尙朝永先生を名譽會員に推すことに、會員一同可決。

一、午後一時半より文學部第一教室に於て公開講演會開催。講師、演題並論旨の大要は次の通りである——

一、「唯物史觀と實存哲學」
—西田哲學に連關して—　神戸大學教授　武市健人氏

近代の歷史社會並にそれに於ける人間性の破綻の自覺として生まれたものが實存哲學であり、こゝにニヒリズムとしてのその一般的性格の由來がある。それは歷史的世界との緊迫した對決に於て歷史を超えたもののなかにその定位をもとうとする。實存哲學が現實意識に深く根ざすものであるにもかゝわらず、結局は觀念論と見做される所以である。それは特に否定觀を中心とするキエルケゴール・ハイデッガー、否定觀を逆轉して積極的肯定觀に出ようとするニィチエ、最後に徹底的な否定觀としての西田哲學をも一應之に入れて考へることが出來る。西田哲學の否定觀は徹底しており、それは一言でいえば死の哲學である。然しそれが超歷史的原理に立脚する限りなお觀念性を出でない。人間性の死の眞に現實的な原理は歷史的意識に終始する唯物論にはじめて期待される。

自然的唯物論、唯物史觀、史的唯物論は一應區別して考へられねばならない。然し、內容的實質の觀點から特にその非觀念論的性格を重視して見るときは、一括して唯物史觀と呼んでよい。ところで、ヘーゲル哲學の逆轉はキエルケゴールの實存哲學であり、これら觀念論的立場の根本からの逆轉こそ歷史的意識に終始するマルクスの唯物史觀の立場に他ならない。それは逆說的になお人間性を主張する實存哲學の觀念性を觀念的に（西田哲學の道）ではなく否定した絕對的必然のニヒリズムであり、それは歷史的意識の必然一本に立つことにより却つて具體的に超歷史的なるものをも含み、人間實存の眞に現實的な自由を開示するものとも考へられる。

一、「わが國と哲學」　大阪市立大學教授　坂田徳男氏

西洋哲學、ギリシヤの哲學はどのようにしてわが國に入つて來たか、それを最初に哲學と譯した西周とはどのような人であつたか。最初から哲學と譯されたわけではないが、誰がどのように譯したのであるか。等に就いて自由に述べながら話を始められる。ところで最初フランス、イギリスの思想が多く入つてきたが、後ドイツ哲學が壓倒的となる、ドイツ哲學の方が深遠と思われたのかも知れぬ。此等三つは夫々特質を持つている、イギリスは常識（common sense）フランス

は眞識（bon sens.）ドイツは理性（Vernunft）が中心となる。日本人はどうであるのか。一般に常識的と言われるが、その常識は知に根ざしているかどうか。深い意味で、生きた哲學者の智慧としての常識を缺いているのではあるまいか。常識とは直觀的なものである、そのような直觀的常識が哲學上の大きい問題である。常識は專門と區別されねばならぬ、學問は專門であることも必要ではあろう、しかし哲學は常識、智慧を問題にする、誰にも解ることを問題にしている。專門家が、解り易く說明するとき、彼等は哲學的敍述といつている如くである。專門的科學的方法論よりも必要なことは、人間が現實に生きていることの問題に直面し、自分の知識を生かす知慧である。哲學の問題は、生きる人間への關心にあるのであつて、その意味で哲學は、學問として理論的ではあるにしても、生きる實踐的面に關係している。知識の全領域を占めるというような、アリストテレス、ベーコン等の道は、今日では事情を異にする。一個人が無限の知識をくみ盡すことは第一不可能である。哲學も、それでは、他の科學のように專門化すべきであろうか、むしろ反對に自己の專門に閉ぢ込もる科學者が、それを越えることに於いて哲學に入るのである。哲學は科學的な專門の彼方にある、生きる常識と知慧の世界にある。專門化とは自己が自己を抽象することであるが、自己抽象も、自己の世界を持つことによつて初めて可能である。（時間不足にて未完）

一、最後に澤潟久敬教授（阪大）の挨拶。朝永先生、並に兩講師の方に感謝。本日の眞き集いを喜ぶ。閉會五時。なほこの後、文學部會議室に於て晩餐懇談會が開かれた。（森）

關西哲學會規約抄

第一條　本會は關西哲學會と稱する

第二條　本會は事務所を京都大學文學部哲學研究室内におく

第三條　本會は會員相互の研究上の連絡をはかり以て哲學の發達に寄與することを目的とする

第四條　本會はこの目的を達成するため左の事業を行う
1、年一回の哲學大會の開催　2、隨時各地における哲學研究會の開催　3、各研究機關相互の連絡　4、會員の研究發表に對する種々の援助　5、その他必要な事業

第五條　本會は關西在住の哲學專門研究者ならびに哲學に關係ある諸學の專門研究者その他これに準ずる者を以て會員とする　入會には委員會の承認を要する

第六條　總會は年一回定期に開きその他必要あれば委員會の決議によつて臨時に開くことができる　總會は會の活動の根本方針を決定しまた一般報告ならびに會計報告を受ける

第八條　委員は會員中より府縣別に一名以上を會員數に比例して互選する

第十五條　會員は會費として年百圓を納入する

第十六條　本規約は委員會の決議を經て變更することができる但し總會の承認を要する

附則
一、本會は日本哲學會の事業に協力し同會の地方支部としての事業をも行う
二、本會會員にして日本哲學會の會員を兼ねるものは本會に二百圓を納入することによつて日本哲學會ならびに本會の會費を納めたことになる

大西友太氏「歴史哲學の問題」の正誤表（特に必要と認められるものについて）

頁	行	誤	正
三百八十六	二一	一三	für sich	für uns
三百九十	五八	七	體系	體驗
三百九十七	二二	四	相互媒介の全體否定	自己否定による相互媒介
同	三五	三	との分離	その全體
同	同	四	如き	所の

大阪大學哲學茶話會

一、昭和二十五年十月十四日
「持續の形而上學」　池長澄

一、同　十二月二日
「デカルトの神（近代精神と超越の問題）」　三輪正

一、同　十二月十六日
「ハイデッガーのニヒリズム」　田中加夫

一、昭和二十六年五月十九日
「佛教的生に於ける佛と人間との關係」　木全德雄

寄贈雜誌論文目次（受領順）

社會科學文獻解說　大阪市立大學經濟研究所編　東京　日本評論社　定價三五〇圓

- 林　直道　價値論論爭の正の二つの道
- 川合　一郎　マルクス經濟學と近代經濟學の「綜合」
- 山本正治郎　恐慌の理論
- 木下　俊二　國際價値論爭批判
- 興村　茂夫　戰後世界經濟と民族＝植民地問題
- 宮土　一男　會計學における二つの方向
- 杉野　明夫　科學的財政學の課題
- 西村　紘通　勞働力の價値法則と勞働組合
- 市原　亮平　過度期の問題と經濟主義
- 巽　信晴　國家國古資本主義の理論
- 青村　勝　人民民主主義
- 森　信成　唯物論と實存主義

文獻目錄

哲學雜誌　（東京大學文學部・哲學會）第六十五卷第七〇七號（八月）

特輯「宗教とは何ぞや」

- 石津　照璽　宗教の狀況とその存在論的根據
- 今田　恵　宗教とは何か
  ―その心理學的習慣―
- 櫛淵　寧雄　原始宗教の整理について
- 岡吉　芳野　良男　米國に於ける實存主義と宗教社會主義管
- 芳野　良男　ヤスペルスの「哲學的信仰」

宗教研究　（東大文學部宗教學研究室内・日本宗教學會）第一二三號（十月）

- 石津　照璽　死と宗教
- 大場　磐雄　死の主體的な所在と扶ひ
- 坂本　幸男　考古學上から見た我が上代人の他界觀
- 竹園　賢了　念佛教に於ける死の意義
- 増谷　文雄　我が上代人の來世觀
- 諸戸　素純　行者と罪苦
- 諸戸　素純　死の世界の宗教性

史學雜誌　（東京大學文學部内・史學會）第五十九編第十號（十月）

- 齊藤　忠　古墳より見たる古代史上の諸問題
- 大山　会淳　宋代の郷村における小都市の發展（下）周藤吉之
  ―特に店・市・坊を中心として―

密教文化　（高野山大學内・密教研究會）第十一號（七月）

- 大山　会淳　密教學史概說
  ―室町時代、附・大海大僧正傳―
- 野澤靜證譯註　安慈藏　唯識三十頌釋、調伏天造唯識三十頌釋（五）
- 内海虎之介　宗教哲學者としてのカント
- 櫻原　信一　社會政策の概念規定
- 英語譯十卷章　密學實相義（四）

經濟學雜誌　（大阪商科大學・同經濟研究所）第二十三卷第三號（九月）

- 川合　一郎　貨幣資本と現實資本
  ―いわゆる「金詰り」の論理―
- 林　直道　再生産＝恐慌論と近代経氣理論
  ―吉田義三氏の所説に寄せて―

國語國文　（京都大學・國文學會）第十九卷第一號（九月）

- 藤重　敏　句格・言・第二條結
- 中村　幸彦　安樂庵策傳とその周邊
- 安藤直太朗　今昔物語集・卷十七・出典考
- 塚原　鐵雄　落窪物語の人物とその成立
- 澤潟　久孝　千鳥鳴くなりつま待ちかねて
- 澤潟　久孝　新校萬葉集改訂表

國語國文　（京都大學・國文學會）第十九卷第二號（十月）

- 岸　得藏　魚里三所世帶
- 西宮　一民　井組の一性格
- 後藤　丹治　遊京授錄と馬琴
- 前田金五郎　大矢數題材管見
- 阪倉　篤義　解書と分類
  ―新撰字鏡について―

靜岡大學教育學部研究所三島分所研究報告（七月）

- 池山　穣一　環境法的觀念論と綜合法的唯物論との關係について
- 岡田　英雄　上代における補助動詞の一機能
- 加藤　三郎　大學における一般陶冶と職業陶冶
- 清水　守　ベルカント小論
- 島居　攻好　米軍の行つた外國語教育に就て
  ―オーラルメソッドに對する一反省―
- 三輪　明　ジョン・ゴールズワージー（John Galsworthy）の戯曲を通じて見たる社會觀
- 吉濱　謙三　自記打點式多重電流計の電接及び印字機構の研究
- 若林　淳之　「人はほげものの世にないものはなし」と言ふ事
  ―西鶴理解への一つの試み―
- 松本　貴司　辯論に於ける二三の問題について
- 渡邊　强三　ホルモンによるドジョウの産卵促進

立命館文學　（立命館大學・人文科學研究所）第七十六號（九月）

- 淺井　潔　サルトルの無
  中國古代に於ける人間の解放と
  その生體性の自覺（五）
- 笠原　伸二　古代ギリシヤ人のすがた
  ―とくにソクラテスのばあい―
- 國分　敬治　Unfreud Zweiheit (Dualität)
  に就いて
  ―シェリング「自由論」を中心として―
- 岸田　直　カントの構想力に對する一考察
- 三崎　義泉　ドイツ觀念論研究序説（ヘーゲイヒテ無神論論爭の意義）